

# 執筆要項

公益財団法人 東海ジェンダー研究所

原稿執筆の要領を、1. 本文、 2. 注、 3. 文献一覧に分けて次のように定める。

## 1. 本文

### (1) 原稿を記述するときの要領

- 1) 原稿は横書きとし、フォントはMS明朝体、英文にはCenturyを用いるのが望ましい。文字サイズは、10.5ポイントとする。
- 2) 和文については句点、読点を用い、数字は原則半角とする。引用や文献の記載で英語等、外国語を記載するときは、コンマやピリオドを使用することもできる。

### (2) 引用文については、以下のように定める。

- 1) 引用文は「 」に入れ、引用文に執筆者の文言を挿入する場合は[ ]に入れる。インターネット上の資料から統計等の引用をする場合は、本文中には( )で資料名と年を入れ、文末の文献一覧で、サイトのURLと閲覧日を明記する。
- 2) 引用文が長い(3行以上にまたがる)場合は、カッコに入れるのではなく、3文字下げで記載し、引用の前後を1行空けにする。

### (3) 見出し

論文には節に区切って見出しをつける。見出し、小見出しは、次のような順位に沿って付けることが望ましい。

章：1. ～ 2. ～ 3. ～  
節：(1) ～ (2) ～ (3) ～  
項：1) ～ 2) ～ 3) ～

## 2. 注の付け方

### (1) 本文中の注

本文に関する注記は、ワード文書作成機能を用いて、脚注(半角数字)とする。注番号は特段の支障がなければ文末の句点の内側、あるいは直近の読点の内側につける。

### (2) 本文中の文献注

- 1) 本文中の文献注は、文献が和文でも欧文やハングル等でも、全角の丸カッコ( )を用いた割注で記載する。カッコ内に、著者名の姓のみをいれ、出版年、該当ページを、p. または pp. で示し、ピリオドの後は半角空ける。例(水田 1973, p. 88) 頁と頁を繋ぐハイフンは半角ダッシュを用いるか、半角ハイフンとする。
- 2) 再度同じ文献を示す必要がある場合、略語を使うことなく再度、著者名と年を記載する。

## 3. 文献一覧について

(1) 文献は本文末に文献一覧としてまとめて示す。文献一覧に示す文献は、基本的に本文中で文献注をつけ、引用あるいは参照したこと言及した文献に限る。

(2) 文献一覧は、著者(編者)名(順列の都合上、姓を先にする)、出版年、題名、版(または刷)、出版社(必要に応じて出版地)を示し、姓をアルファベット順に、同一著者の場合には、著作、論文の区別なく、古いものから順に並べ、同一著者の同年出版物についてはa b cで順をつける。

- (3) 日本語単行本の書名、雑誌・新聞名、および映画のタイトルは『 』に、論文の題名は「 」に入れる。ただし論文名中の一重カギカッコの扱いについては、執筆者の裁量に任せる。外国語単行本の書名はイタリック体にし、論文のタイトルは立体で“ ”に入れる。副題も略さず記載する。一般に副題は主題の後にコロンをつけ、その後に記載し、全角コロンの場合はそのまま、半角コロンの場合はコロンの後で半角空ける。
- (4) 著者が3人以下の場合は、全員の著者名を記載する。4人以上の場合は、日本語文献では最初の著者のあとに「他」をつけ、外国語文献では最初の著者のあとに「*et al.*」をつける。
- (5) 文献一覧で論文を挙げる場合は、最初と最後の頁を記すこと。本文の文献注では、該当頁を記すこと。
- (6) 編書の場合は、日本語文献では編者名のあとに「編」をつけ、外国語文献では編者名のあとに「ed.」または「eds.」をつける。
- (7) 図、表については、キャプションを付けて、出典（ページを含む）あるいは自作であることを明示する。複数の図や表については、番号を付けて、本文中で対応が付くようにする。図1、図2、・・・ 表1、表2、・・・。
- (8) 以下に、文献表示の具体的事例を記す。

水田珠枝 (1990) 『女性解放思想の歩み』 第17刷 (初版 1973) 岩波書店。

安川悦子 (1999) 「分業論再考：ジェンダー『平等』の経済学を求めて」『名城商学』49(1) pp. 81-113。

中田照子 (2010) 「日本における子どもの貧困とジェンダー」(財) 東海ジェンダー研究所 記念論集編集委員会編『越境するジェンダー研究』明石書店 pp. 76-89。

加野 泉 (2019) 「アメリカ・ヘッドスタートの描く「新しい」父親像」『ジェンダー研究』(東海ジェンダー研究所) 第21号 pp. 81-107。 ネットでも閲覧可能 <https://libra.or.jp/images/gstudy21.pdf> (2019年7月4日閲覧)

Takahashi Mutsuo (2006, 2019) *On Two Shores: New and Selected Poems*, translated from Japanese by Ohno Mitsuko and Frank Sewell, Dedalus Press, Dublin.

Patessio, Mara and Ogawa Mariko (2005) “To Become a Woman Doctor in Early Meiji Japan (1868-1890): Women’s Struggles and Ambitions,” *Historia Scientiarum*, 15 (2) pp. 159-176.

Tuana, Nancy (ed.) (1994) *Feminist Interpretations of Plato*, Pennsylvania State University Press.

Ogawa Mariko (2012) “Japanese Women Scientists: Trends and Strategies,” in Neelam Kumar ed., *Gender and Science across Cultures*, Cambridge University Press India, New Delhi, pp. 150-171.

外国語文献を引用しその日本語訳書を記載する場合と、原著を示すことなく訳書のみを示す場合

Freedman, Estelle B. (2002) *No Turning Back: The History of Feminism and the Future of Women*, Ballantine Books: エステル・フリードマン (2005) 『フェミニズムの歴史と女性の未来』 安川悦子・西山恵美訳 明石書店。

フリードマン、エステル (2005) 『フェミニズムの歴史と女性の未来』 安川悦子・西山恵美訳 明石書店。

※ 上述に準じた原稿執筆が難しいときには、事務局にご相談ください。

※ 『ジェンダー研究』はホームページ及びJ-STAGE (国立研究開発法人科学技術振興機構 [JST] による科学技術情報発信・流通総合システム) 上で公開されます。投稿された原稿は、ネットワークを通じて不特定多数に無料で公開されることに同意しているものとして扱います。 (2024年2月末日 改訂)